

平成 20・21 年度 目黒区教育委員会 教育開発指定校

[研究主題]

教科センター方式・ICT 機器の活用による新たな学習形態の確立

～教科の専門性を生かした指導の工夫～

2008-2009

Information

Communication

Technology

社会

国語

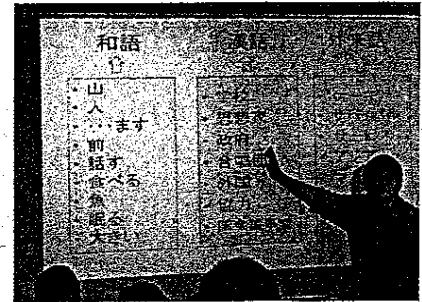
数学

理科

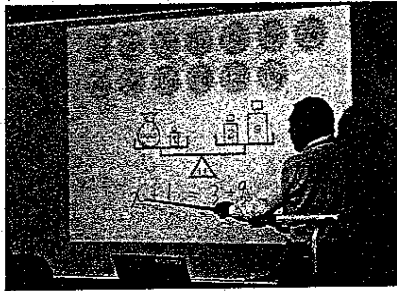
目黒区立目黒中央中学校

ICT機器を活用した授業についての生徒の声（アンケート自由記述より）

- ・ICT機器を使うようになって話を聞くだけでなく見ることもでき、関心がわいた。（国語）
- ・授業が効率よく進むので良かった。（国語）
- ・ビデオを見ることでもっとよく分かった。（国語）
- ・見やすくて分かりやすい。（国語）
- ・先生の説明がすごく分かりやすかった。（国語）
- ・発表でおおいに利用した。（社会）
- ・授業が分かりやすかった。（社会）



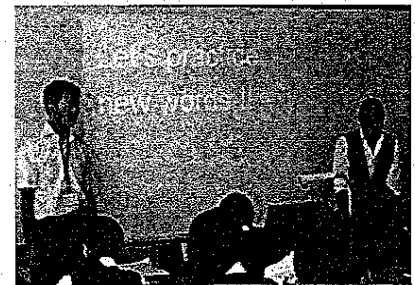
プレゼンテーションソフトを利用（国語）



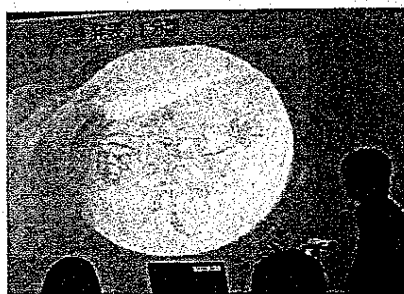
プレゼンテーションソフトを利用（数学）

- ・効率よく授業が進んだ。（社会）
- ・とても素晴らしい授業だった。（社会）
- ・数学が好きになった。（数学）
- ・ICT機器を使った方が分かりやすかった。（数学）
- ・ICT機器によってもっと理解できた。（数学）
- ・ICT機器は見やすいので、分かりやすくノートやワークシートにまとめられる。（数学）

- ・図形の授業なので、とても分かりやすかった。（数学）
- ・映すことによって時間の短縮ができ、効率よく進む。（数学）
- ・一目で分かり、よく理解できるようになった。（数学）
- ・計算が分かりやすく、頭に入るようになった。（数学）
- ・ICT機器を使うと分かりやすい。（理科）
- ・プロジェクターは便利。（理科）
- ・授業が楽しく感じる。（英語）
- ・覚えやすく、ノートをきれいにまとめやすくなった。（英語）
- ・さすが新校舎と思える授業です。（英語）
- ・ICT機器を使うと分かりやすく興味ももてて良い。（英語）
- ・プリントなども画面に出ているので、書き込みやすくなった。（英語）
- ・先生はICT機器を上手に使えていると思う。（英語）
- ・言葉では分からないことまで分かって良かった。（英語）
- ・とても分かりやすい。（音楽）



プレゼンテーションソフトを利用（英語）



実物投影機を利用し手元を映す（美術）

- ・分かりやすい説明でとてもスムーズで、良い授業だと思う。（美術）
- ・内容がよく理解できた。（美術）
- ・技術科は特に図が重要な教科なので、大きく映し出されるのはとても良い。（技術）
- ・プロジェクターによって作業の仕方が分かりやすい。（技術）
- ・ノートをきれいにまとめやすくなった。（技術）
- ・実際に縫ったり作ったりしているのが大きくみんな同時に見えて良い。（家庭）

- ・体育は説明だけでは分からないところがあるので、ICT機器があって良かった。（保健体育）
- ・ノートにきれいにまとめることができたので、試験勉強がはかどる。（保健体育）
- ・ICT機器を使って、グラフの説明などが、とても分かりやすかった。（保健体育）

教員

○ 文部科学省『学校における教育の情報化の実態等に関する調査』「教員のICT活用指導力チェックリスト」を本校で実施した集計(平成20年4月・平成21年3月・7月の調査結果より)と東京都・国との比較

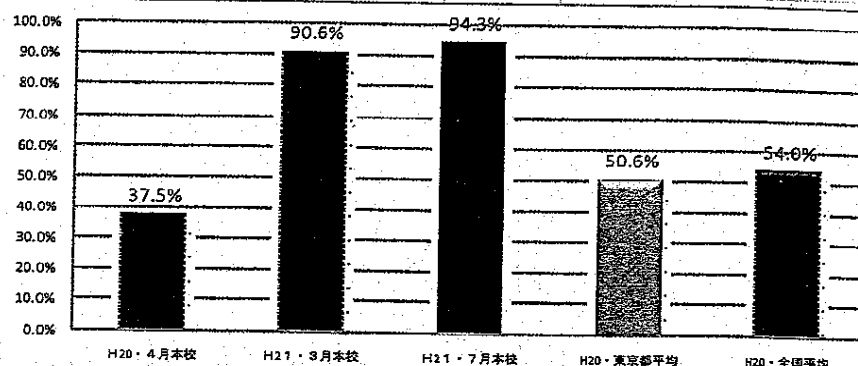
※ グラフの「%」は、上記の調査における「わりにできる」「ややできる」「あまりできない」「ほとんどできない」のうちの「わりにできる」「ややできる」の回答の合計

【授業中にICTを活用して指導する能力】

☆教員数: 平成20年4月・平成21年3月は24名、平成21年7月は26名

《分析》

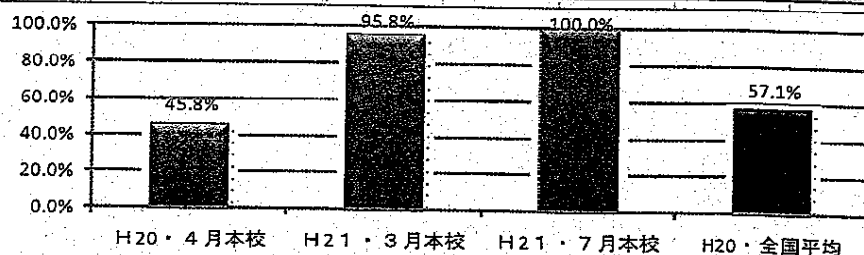
・新校舎移転直後(平成20年4月)は「37.5%」と文部科学省『学校における教育の情報化の実態等に関する調査』「教員のICT活用指導力チェックリスト」の東京都・国平均より低かった。
・新校舎において、ICT機器を活用した授業に取り組んで1年後の3月には「90.6%」と向上した。
・本年度7月は「94.3%」と、東京都・国平均を大きく上回っている。



○ 学習に対する生徒の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。

《分析》

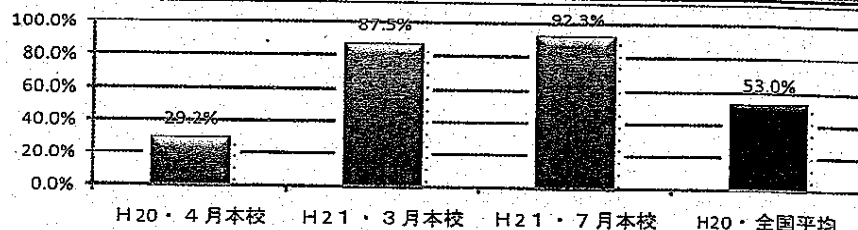
・新校舎移転直後(平成20年4月)は「45.8%」と低かったが、1年間活用した結果、「95.8%」まで向上した。
・本年度7月には、「100%」まで向上した。



○ 生徒一人一人に課題意識をもたせるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。

《分析》

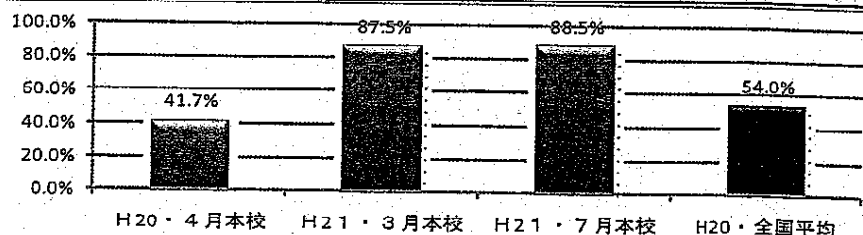
・新校舎移転直後(平成20年4月)は「29.2%」と低かったが、1年間活用した結果、「87.5%」まで向上した。
・本年度7月には、「92.3%」まで向上した。



○ わかりやすく説明したり、生徒の思考や理解を深めたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。

《分析》

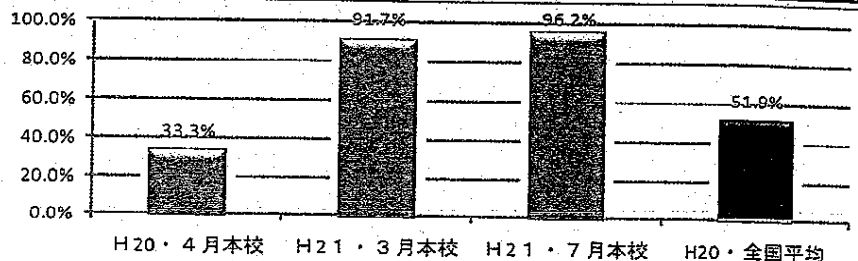
・新校舎移転直後(平成20年4月)は「41.7%」と低かったが、1年間活用した結果、「87.5%」まで向上した。
・本年度7月には、「88.5%」まで向上した。



○ 学習内容をまとめる際に生徒の知識の定着を図るために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などをわかりやすく提示する。

《分析》

・新校舎移転直後(平成20年4月)は「33.3%」と低かったが、1年間活用した結果、「91.7%」まで向上した。
・本年度7月には、「96.2%」まで向上した。



2 特別支援学級における「交流及び共同学習を推進する学級経営」

＜担当＞ 松本昭彦 坂口千秋 高橋尚子 加儀修哉 栗原孝幸（児童指導）
清水玄太・村原志野・明石麗（特別支援学級補助員）

（1）はじめに

平成13年、文部科学省より、ノーマライゼーションを基本理念とする「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」が出された。この報告で初めて、特殊教育分野でも「障害のある者も障害のない者も同じように社会の一員として社会活動に参加し、自立して生活することができる社会をめざす」というノーマライゼーションの理念の実現に向けた取り組みを行うという方向性が打ち出された。従来の「特殊教育」から「一人ひとりの教育的ニーズに応じた特別支援教育」への転換である。その後、国は改革の作業を進め、東京都においても特別支援教育推進計画をもとに特別支援教育コーディネーターの指名、校内委員会の設置、巡回相談の推進等、特別支援教育の充実が推進されてきた。昨春に改訂された新しい特別支援学校中学部学習指導要領は

- ① 一人ひとりに応じた指導の充実
- ② 自立と社会参加に向けた職業教育の充実
- ③ 交流及び共同学習の推進
- ④ 障害の重度・重複化、多様化への対応

を主な改善事項としている。交流及び共同学習については、「障害のある子どもと障害のない子どもとの交流及び共同学習を、計画的、組織的に行うこと」を規定した。また、自立活動の内容にも、新たに「人間関係の形成」が加わった。対人関係という対一のイメージから、さらに広い人間関係をめざすことをねらいとしている。

（2）しいの木学級（「自閉症・情緒障害学級」・固定学級）の概要

しいの木学級は、小学校情緒障害学級において指導を受けた高機能自閉症の生徒を対象に、昭和55年、目黒区立第六中学校に固定学級として開設された。その後、目黒区における今後の特別支援教育のあり方を踏まえ、中学校段階のLD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群等を対象とした固定学級として、目黒中央中学校に新たに設置された。

① 対象生徒

情緒障害、LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガー症候群などの発達障害があり、全般的な知的発達の遅れを伴わないが、他人との意思疎通及び対人関係の形成が困難である程度のもの。

② 在籍生徒（平成21年11月現在）第1学年8名・第2学年3名・第3学年8名 計19名

③ 主な指導内容、特色

- ・ 基礎学力の定着・向上を図る。
- ・ コミュニケーション能力を伸ばし、望ましい社会性を身につける。
- ・ 通常の学級との交流及び共同学習を推進する。
- ・ ICT機器を活用した学習形態をとる。

④ 指導体制 担任4名 児童指導1名 特別支援学級補助員3名

(3) しいの木学級における「交流及び共同学習」の推進

都内では、固定の自閉症・情緒障害学級の設置は少ない。他方、都内では多くの場合、通常の学級に在籍しながら週1～2回「情緒障害等通級指導学級」における教育を受けている。

中学校は、教科担任制で、学習内容も高度になってくるため、生徒の感じるストレスが強くなることもある。通常の学級においては、小学校と比べて学級担任が生徒と接する時間も少なくなり、生徒の特性を把握し、小学校のように声かけや配慮をすることができにくくなる。一方、生徒の実態は、友達とうまくかかわれない経験や学習でのつまずきが重なりと自己肯定感が低下することがある。

本校のしいの木学級は固定学級であるので、その特色を生かしながら、しいの木学級における指導とともに、この3年間、通常の学級との交流及び共同学習を推進してきた。それは、「障害者基本法や教育基本法において『交流及び共同学習』が盛り込まれ、新小・中学校学習指導要領総則にも示されたこと」「学級の生徒は、学習方法が身に付いていなかったり、認知の特性があったりして、学習において支援を要するが、知的障害ではないこと」「学習のつまずきとともに社会性の乏しさがあることから、調和のとれた発達を考えた時、交流及び共同学習の機会を多く設ける必要があったこと」などからである。

【交流及び共同学習】

学年行事や学校行事を含む特別活動や総合的な学習の時間を中心に直接交流を深めてきた。参加の形態は通常の学級の教員と相談しながら、学年や行事によって柔軟性をもたせている。また、部活動にも現在、在籍19名中11名が所属し活動している。

各教科の学習においては、現在、生徒を6グループに分け、保健体育、音楽、美術、技術・家庭科、理科などの学習に参加している。教科や指導・支援の方法（側に付き添う指導・支援、巡回指導・支援）については、個別指導計画作成時に、個々の生徒のニーズに応じながら、学習状況や集団への適応状態も含めて本人及び保護者と相談、決定している。状況に応じた見直しや修正は随時行う。また、宿題や提出物、プリント類やノートなどのまとめ方までの指導・支援や補充学習なども行っており、生徒が安心して学習に参加できるように配慮している。

時間割の例 (火曜日)	共同学習に入るクラス						しい の木
	1 A	1 D	2 A	3 B	3 D	3 E	
	4名	4名	3名	3名	3名	1名 1名	個 別 指 導
1校時	保体	国語	社会	英語	家庭	数学 英語	
2校時	国語	保体	理科	国語	数学	理科	
3校時	社会		英語	美術	音楽	英語 数学	
4校時	数学	英語	保体	家庭	美術	国語	
5校時	英語	美術	国語	理科		音楽	

- ・ 下線教科が共同学習である。個別指導計画に基づき、計画的に実施する。
- ・ 学級における学習は、通常の学級の教科書を使用し、通常の学級に準じた指導を基本としている。
- ・ 各教科の授業時数、週時程は通常の学級に合わせる。

(4) 成果と課題

「交流及び共同学習」の成果として、学級の生徒の集団適応力や社会性の向上があげられる。学級の生徒（19名）は、小学校では全員が通常の学級に在籍し、内8名は通級による指導を受けていた。また、学級の集団になじめない経験をした生徒もあり、集団の中での学習への不安を抱えて入級した生徒もいる。学習

や対人関係のつまずきが、自己肯定感を低くし、自信を失わせてしまったのではないかと考えられる。

入級後、多くの生徒がこうした状況を改善してきている。その上で、生徒は、学級を自分の居場所と意識し、学級を基盤に交流や共同学習に参加している。相談できる大人がいつもすぐ近くにいることも共同学習を円滑にしていると考えられる。

学年が上がるにつれ、共同学習の教科を増やし、教科の専門的な指導を受けて学力の定着・向上につながっている生徒も多い。共同学習の教科は、通常の学級と同じ評価・評定をしており、進路選択にも有効であり、励みとなっている生徒もいる。

また、共同学習は、学力の定着・向上だけでなく、集団生活のルールやマナー、困ったときの対処方法など、学級で学んだことを実践できる場、ソーシャルスキルトレーニングの場ともなっている。大きな集団とともに活動することをとおして、集団の一員としての自覚、自己コントロール力を徐々に身につけてきている生徒が多い。

共同学習をして、良かったと思うことについて、1年生は、「通常の学級の人と友達になった。」「みんなと一緒に勉強できて良かった。楽しくできる。」「優しい人がいる。」ことをあげ、2年生は「授業に集中できる。自信がつき、通常の学級に入りたいと思えるようになった。」「友達ができた。先生が好き。みんな大好き。」と答えている。3年生は、「苦手だった教科ができるようになり、自信がついた。学校には安心感があり、自分も色々と克服して、みんなとなじめなかった自分が変わった。」と記している。みんなと一緒に学習する喜びから、次第に自信を回復し、自己の変容に気づき、肯定的な評価が高まってきている様子がうかがわれる。

もう一つの成果としては、通常の学級の教員や生徒の、障害に対する理解が得られてきたことがある。通常の学級の教員からは、「共同学習は、しいの木学級の生徒にとって、学力向上につながる」「学習指導の質の向上を図ることができるようになった」との声が出ている。しいの木学級の生徒を理解し、特性に応じた配慮や指導をすることは、通常の学級の生徒にも有効かつ必要なことだと考える。また、ICT機器を活用した授業形態をとっていることも、視覚優位の生徒が多いしいの木学級の生徒にとっては効果的である。

本校では、校内通級の形で共同学習を行えるので、教職員間の連携・協働を図りやすい利点を生かし、今後も情報交換・打ち合わせ・教材の共有化などを進めていく。

課題としては、個々の生徒の特性に応じたより一層の専門的な指導・支援方法を充実させ、効果という点での検証を続けていくこと、通常の学級の教員との連携・協働をより一層進めること、障害のさらなる理解や啓発を図っていくことがあげられる。

(5) おわりに

特別支援教育においては、学校に生徒を合わせるのではなく、学校が生徒の側に立った視点で、個々の教育的ニーズに応じた指導の充実を図ることが大切である。

学校が組織的に日常的に支援する体制を作り、さらに交流及び共同学習により、通常の学級と特別支援学級の教員の専門性を生かした協力的指導を進めていくことが、しいの木学級の生徒にとっても、通常の学級の生徒にとっても、今後ますます重要になってくると思われる。

3 「ラーニングセンター（PCコーナー・キャリアコーナー・図書コーナー）の有効活用」について

＜担当＞ 納谷玲子・八重樫ヒサ子・岸裕子



ラーニングセンター

(1) 移転当初（平成20年4月）の課題

- ① 授業時間でのラーニングセンターの有効活用方法。
- ② 授業時間以外でのラーニングセンターの有効な活用。
- ③ 教師の見守りなしでラーニングセンターの秩序を維持する方法。

(2) 2年間の取り組み

① 移転当初（平成20年4月）の課題解決に向けての改善策。

- ア 各教科の授業及び部活動・委員会等において、積極的にラーニングセンターを活用する。
- イ 図書委員会の活動として、図書の貸し出しを年間とおして実施する。
- ウ 昼休み及び放課後にラーニングセンターを開放し、生徒の「自学・自習」を奨励する。
- エ キャリアコーナーは、PTAに依頼し放課後に毎日、保護者ボランティアによる見守りをさせていただく。

② 現在の様子

ア PCコーナー（パソコンコーナー）

- (ア) 授業・部活動・委員会・学校行事前の準備などでの活用を積極的に行っている。さらに、放課後は、個人的な調べ学習等にも活用している（生徒手帳を校務センターに預けることで使用生徒の確認）。
- (イ) PCコーナーの使用のルールを次のように定め、全生徒に指導している。
 - ・ 生徒は、自分のパスワードを使用する。
 - ・ メールやチャット等には利用しない。個人情報の公開はしない。
 - ・ 好ましくないページや営利目的のページを見ない。
 - ・ 学校のパソコンに、写真やソフトを勝手にダウンロードしない。 など

イ 図書コーナー

- (ア) オープンスペースであり、常時開放の「施錠しない図書室」として活用している。
- (イ) 毎日、図書委員が貸し出しを行っている。図書コーナーで読書をする生徒も多い。
- (ウ) 目黒区の学校図書館ボランティアリーダーを中心にPTA活動の保護者ボランティアによる新刊本紹介や整備、また、定期的に行う図書委員会の活動の支援などを行っていただいている。

ウ キャリアコーナー

- (ア) 上級学校等に関する資料をいつでも見られるようにしており、生徒は活用している。
- (イ) 「自学・自習」を積極的に行っている。（午後5時まで使用できるようにしている）
- (ウ) 保護者ボランティアの方に、毎日5時まで見守りをさせていただいている。

(3) 主な成果

- ① 各教科・総合的な学習の時間などにおいて、ラーニングセンターを積極的に活用するようになった。生徒のPC活用の技術が向上してきている。
- ② 部活動（特にパソコン部、文芸部、イラスト部）が積極的に活用するようになった。
- ③ 昼休み・放課後に、生徒がラーニングセンターを積極的に活用するようになり、本の貸し出しも増えた。生徒にとって、心の居場所としての役割も果たすようになってきている。

4 「教科センター方式によるHR（ホームルーム・学級教室）の活用方法」について

＜担当＞ 佐野文仁・濱島美佐子・濱田元

(1) 移転当初（平成20年4月）の課題

- ① 学級単位での生徒への指導や講話をどのように行ったらよいか。
- ② 生徒の荷物の管理をどのようにしたらよいか。



ホームルームでの朝読書

(2) 2年間の取り組み

- ① 当初は朝読書・短学活（朝と帰り）はHRで行い、学級活動・道徳・総合的な学習の時間については、学年ごとに学級がまとまるように配置を考え、教科教室を割り当てて行っていた。現在では、学級活動・道徳・総合的な学習の時間については、担任の教科教室を各学級に割り当てて（実技教科の担任クラスは別途割り当て）行っている。また、「短学活（朝と帰り）」は、内容によってはHRだけでなく、教科教室でも実施できるようにした。さらに、道徳・総合的な学習の時間において、学年単位で学級がまとまって活動した方が効果的な場合は、当初のような教科教室配置で行うなど、必要に応じたHRと教科教室の使い分けを実践している。
- ② 生徒の学習用具などの管理については、基本的にHRの机・椅子には私物を置かせないことにしている。授業への移動時に教科教室等へ全てを持っていくか、個人ロッカーに施錠して保管しておくようにしている。このようにして自己管理を習慣化させた。

(3) 主な成果

- ① 中間発表時の新たな課題となった「心の居場所となるHRの活用方法の工夫」の例として次のような実践を行っている。

ア 朝読書・「短学活（朝と帰り）」の活動を重視し、担任・副担任と学級の生徒との心の交流を図るようにしている。

イ HR内の掲示物（教育目標・学級のスローガン・集合写真・委員会・係・表彰関係等）を工夫し、学級への帰属意識を強めるようにしている。

ウ 給食をHRで行っている。食事するだけでなく、生徒間や、生徒と担任・副担任のコミュニケーションにより、「HR＝安心していられる場所＝心の居場所」とするようになっている。（給食を教科教室で行った場合、教師が5校時の授業の準備をするので昼休みに生徒が滞在することはできない。）

エ HRはオープンスペースで開放的であるため、生徒の変化に対して周りの人間（生徒も教師も）が気付きやすくなっている。

- ② 生徒を集中させたり、指導を徹底させたりするためのHRと教科教室の使い分けとして、朝読書・給食・「短学活（朝と帰り）」は特に必要な場合を除きHRで実施し、学級活動・道徳・総合的な学習の時間については、教科教室で実施するという形は定着した。平成21年7月のアンケート調査では、大多数の生徒が「教科教室で学習するシステムに慣れた」と思っている。「学級ごとのHR」の設置について肯定的にとらえていることが分かった。



ホームルームでの学級活動



ホームルームでの給食

5 「教科センター方式による校務センターと教科教員コーナーの活用方法」について

〈担当〉 崎元正裕・寺島利幸・三枝利多・野田智子・松野正美

(1) 移転当初(平成20年4月)の課題

- ① 生活指導・進路指導や行事関係打ち合わせなどにおける学年単位の教員間の密な連携をどのようにしたらできるか。(情報連携)

・ 移転当初、懸念された課題は、学年教員間の情報交換を含めた協力体制の確立ということである。教科センター方式(教科教室制)では、校務センターにおける朝の打ち合わせが終われば、全教員が各教科教員コーナーで職務にあたるので、通常は学年の教員同士が放課後や部活動終了後まで会わないことが予想された。そうなれば生活指導をはじめ緊急的な打合せも含めた学年教員間の密な連携はできないのではないかと危惧を抱いた。

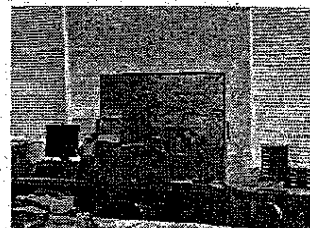


朝の学年打ち合わせ

- ② 校務センターと教科教員コーナーの両方をどのようにして効率的かつ有効に活用するか。

・ 本校では、各教員が校務センターと教科教員コーナーの2つの職務の場所を有する。そのため、例えば、教科書や書類等職務に必要なものが両方に分散してしまい、効率的に活用できないのではないかと考えた。

・ 各教科には、教科教員コーナーが設置されている。このコーナーを、同一教科の教員でいかに有効に使うかを課題として考えた。



学年連絡用ホワイトボード

(2) 2年間の取り組み

- ① 情報連携の推進

ア 学年会・学級会(しいの木学級)の定期開催

・ 各教職員が学年や学級内の情報を共有化し、共通理解して行動連携するために、全学年・学級において、学年会・学級会を定期的(必要な場合は、緊急にも)に実施してきている。学級数・生徒数が多く、しかも学校全体として開校から日が浅く、新たな取り組みに日々取り組んでいる本校にとって、学年会・学級会は非常に大切である。

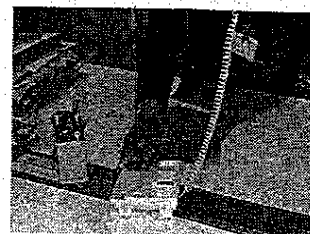
イ 日常的な情報連携の取り組み

・ 朝の職員打ち合わせが終了すると、各教員は教科教員コーナーに分散する。しかし、1人1台割り当てられているPCにより、校内LANの連絡掲示板を活用することで日常的に情報が共有できるようになった。そのため、教員間の関係が密になり校内の様子がよくわかるようになった。

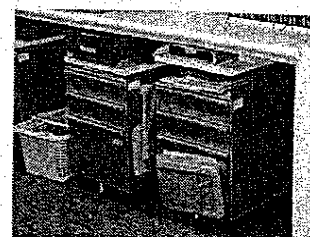
・ 生活指導や進路指導の情報交換等、打ち合わせ等が必要な場合は昼休み等に校務センターに集まって打ち合わせを行っている。

・ 校務センターの各学年の連絡用ホワイトボードに、必要な連絡事項や情報を随時記入するようにしている。空き時間など、校務センターで職務をする際には、必ず情報を確認している。

・ 緊急を要する場合は、校内電話を利用し、お互いに連絡を取り合うようにしている。また、「報告・連絡・相談・確認」を重視し、諸情報は管理職・学年主任・生活指導主任等に速やかに報告できるようにしている。



校内電話(教員コーナー)



移動式フロン

- ② 校務センターと教科教員コーナーの効果的な使用方法の実践

ア 教科教員コーナーで職務を行うことができるように、1人に1台ずつ与えられている移動式ワゴンを毎日活用している。個人情報や扱ったり評価問題を作成したりすることは、校務センターで行っている。

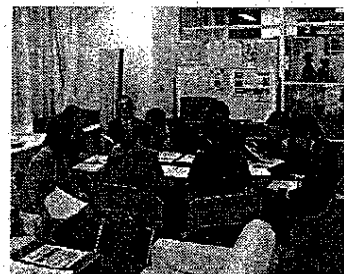
イ 教科教員コーナーでは、日常的に教科の指導方法や教材の工夫などについて話し合っている。また、生徒の状況についても話し合っている。さらに、各教室の廊下壁は強化ガラス張りであることを生かして、授業を日常的に相互に見合っている。

(3) 主な成果

① 学年・学級教職員間の情報連携の充実

校内LANの活用、定期的な学年・学級会、昼休みの校務センターでの打ち合わせ、学年連絡用ホワイトボードの活用、校内電話の利用など、情報の共有化に向けた取り組みは、全教職員で日常的に実践している。

情報連携により、校内それぞれの場所で授業や職務をしている教員が素早く適切な対応をすることができるようになった。特に、生活指導や本年度流行したインフルエンザ対応など様々な課題に迅速かつ組織的に行動できる利点が認識できた。



学年会での打ち合わせ

② 校務センターと教科教員コーナーの効果的な使い分けの実践

移動式ロッカーを活用することにより移転当初よりも、校務センターと教科教員コーナーの効率的な使い分けができるようになった。



教科教員コーナーでの協議

③ 教員の専門性や指導力の向上

担当学年が違っても同一教科の教員が一緒にいられる時間が日常的に多くあるということは、教科センター方式（教科教室制）だからこその大きな成果を生み出している。

- ・ 教科部会の時間を特別に設定する必要がなく、「毎日・毎時間が教科部会」を実践できている。日常的に教科の専門性を磨く場となっている。
- ・ 教科の資料が常に教員コーナーにあるので、教材研究がしやすい。
- ・ 教科の指導方法や授業の悩みなどを日常的に気軽に話し合うことができるため、教科教員コーナーがお互いにとって指導力を向上する研鑽の場所になっている。特に、学年を超えた情報交換ができるため、1年生から3年生までの系統的な学習内容・指導方法を確認でき、教材研究にも役立っている。
- ・ 教科教室がガラス張りで見ることが可能なので、日常的に廊下からそれぞれの授業見学を容易に行うことができ、ICTの活用法など、その時疑問に思ったことや興味をもったことを話し合うことができる。自主的研修が行いやすく、授業力向上に大変役立っている。
- ・ 本校の特色であるICT機器を活用した授業の工夫については、教科教員コーナーでの相談や情報交換が大いに役立っており、教員のICT機器を活用した指導力向上に成果をあげている。

④ 生徒の学習相談の充実

教科教員コーナーに教員がいると、生徒は学習相談がしやすい。日常的な学習相談や定期考査前の学習相談などが頻繁に行われるようになった。

6 「教科センター方式による校務のネットワーク化とPC」について

〈担当〉 松尾啓子・森本幸宏・中西良平・木下武昭

(1) 移転当初(平成20年4月)の課題

大きな課題は、「校内ネットワークシステムによって校務の軽減化をいかにもして図るか」であった。

(2) 2年間の取り組み

- ① パソコンの基本性能を向上させる。(教師用PCのメモリーの増設)
- ② 教職員の校内LANシステム(特に連絡掲示板)の活用により、情報の迅速な共有化を図る。

(3) 主な成果

- ① メモリーの増設で、パソコンの処理速度が速くなり、事務処理時間が短縮できた。
- ② 校内LANの活用により、情報の共有化と迅速な伝達を図ることができ、文書事務の軽減化につながった。校内LANのPC画面には、「本日の予定」「連絡掲示板」「個人連絡」「本日の出張」等が表示され、一日の動きや指導や職務に必要な諸情報が把握できるようになっている。
 - ・ 日課表(一日単位)、週単位・月間単位の日課表、時間割、出張等などの情報を常に表示できる。
 - ・ 格技室や体育館などの施設予約もネットワーク上で管理できる。
 - ・ 職員が作成した文書等にインデックスをつけ、共有化や活用ができる。
 - ・ 出欠表の一元管理が可能となり、指導要録などにも反映されている。
 - ・ 連絡掲示板に全員で共有化しておきたい情報を書き込み、公開することで、職員の打ち合わせのコンパクト化が図れた。このため、時間の節約が図れ、その分、生徒の指導をする時間が増えた。



PCへの出欠入力

7 「エコ・スクールを生かした環境学習の推進」について

〈担当〉 武市夏樹・南弥緒・小林明子

(1) 移転当初(平成20年4月)の課題

- ① 新校舎の特性を生かした環境問題への取り組みはできないか。
- ② 目黒区学校版ISOプログラム実施において本校の特色を生かせないか。

(2) 2年間の取り組み

昨年度(平成20年度)に取り組んだものは以下の通りである。

- ① 各教科などにおける環境教育を実施した。('14教科等で行った環境教育の例'を参照)
- ② 生徒会によるグリーンプロジェクト・毎月1回の牛乳パックの回収(ジュース等のパックも含む)・学校敷地内の雑草取り、環境委員会によるクリンピック(環境美化コンクール)と清掃強化WEEK、サイエンス部による省エネ(電気・水)の呼びかけと太陽光発電のエネルギー消費調査、ボランティア部による学校まわりの環境整備(ゴミ拾い)の実施などを行った。
- ③ 目黒区学校版ISOプログラムでは、キャッチフレーズとして「めざせピカピカエコスクール」を選定し、省エネルギー・省資源や環境整備に取り組んだ。

今年度(平成21年度)に取り組んでいるものは以下の通りである。



エコキャップの回収

① 各教科などにおける環境教育を実施した。（「(4) 教科等で行った環境教育の例」を参照）

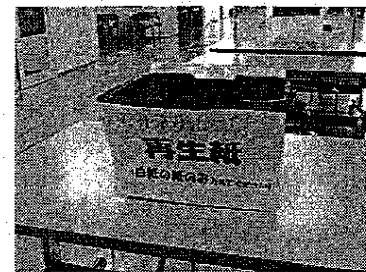
② 生徒会・環境委員会・サイエンス部・ボランティア部による昨年度からの活動は継続している。本年度は新たにペットボトルのキャップ回収をボランティア部が中心となって行っている。また、各教科コーナーに再生紙ボックスを置き、不要になったプリント類などを生徒が入れられるようにして、省資源の取り組みを実行している。さらには、地域の落書きを消す活動にボランティア部を中心にした有志の生徒が参加した。



生徒会によるグリーンプロジェクト

目黒区の環境フェスタにおいて生徒会とサイエンス部が学校での取り組みを掲示発表した。

③ 学校版めぐろグリーンアクションプログラムでは、キャッチフレーズとして「eco でエコとしよう～我慢できる学校～」を選定し、全校生徒による美化活動（クリンピック、清掃強化WEEK）やリサイクル活動をととして環境美化の意識や環境に対する興味・関心を高める取り組みを行っている。



再生紙回収ボックス

(3) 主な成果

牛乳パックの回収枚数は増加した。クリンピックを開催することによって、生徒の環境美化への意識が高まってきている。学習コーナーにおける再生紙回収ボックスの設置により、生徒参加による紙ゴミ排出量の減少が図られている。今後も活動を継続し、環境問題への意識を高め、環境教育を一層推進していきたい。

(4) 教科等で行った環境教育の例

教科名	テーマ	内容
国語	地球環境を守る	地球環境問題に関する説明文を読み、自分の考えをもつ（各学年）
社会	ごみ処理、環境汚物・リサイクル	ごみ処理やリサイクルについて学ぶ（2年）
理科	自然環境調査 大気汚染調査	自然環境や大気汚染の調査をし、地球環境について学ぶ（3年）
英語	環境、リサイクル	絶滅動物・環境問題（1年）、3Rs（2年）、風力発電（3年）
美術科	環境、リサイクル	環境保全ポスターの作成（3年）、ごみを素材に工芸作品の制作（2・3年選択授業）
家庭科	環境	三角コーナーを使用しない（全学年）
保健体育	環境	ごみの処理・環境汚染について（2年）
生徒会 (有志・全校生徒)	環境、リサイクル	地域清掃・落ち葉拾い、牛乳パック回収・ベルマーク回収・紙のリサイクル・ごみの分別
環境委員会	環境・校内美化	クリンピック・清掃強化WEEK（全校生徒）
保健給食委員会	環境	牛乳の残量調査（保健給食委員）
その他	校内美化・緑化	ガーデニングのコンテナ作成

8 「教科センター方式を生かすための生活指導の充実」について

＜担当＞ 野口淳・北澤邦彦・酒匂啓子・末原久志・石井田順子



教育目標

(1) 教科センター方式を生かすための生活指導の課題

本校の教育目標は、「自立と共生」である。また、学校経営方針には、「豊かな心」の育成を掲げており、「規範意識・思いやりの心・社会における基本的なルールを身に付け行動できる生徒」「自己理解に努め、自らの生き方を自己決定できる生徒」「生徒同士が互いのよさを認め合い、切磋琢磨しながら自らを向上させていく生徒」「学校や伝統と文化を愛し、社会や公共の福祉のために積極的に貢献する生徒」の育成を目指している。

教科センター方式（教科教室制）の本来の目的は、教科教室の設置により授業の質を高め、生徒にとって「わかる・できる」という充実した授業を毎時間実施することにあると考える。しかしながら、生活指導上の課題によって教師と生徒が授業に集中できない状況にあったのでは、教科センター方式の本来の目的を達成するのは難しくなる。

そこで、新校舎の教科センター方式を生かし、質の高い授業を教師が行い、それを基に生徒が授業に集中できるようにし、さらに豊かな心を育てるために生活指導を充実させることを研究課題として考えた。具体的な課題は以下のとおりである。

- ① 授業に集中するための授業規律の確保など、規範意識に支えられた生徒の健全育成をどのように行っていくか。
- ② 不登校や友人関係など様々な悩みを抱えている生徒への相談体制をどう充実させていくか。
- ③ いじめ発生0を目指したいじめ問題への対応をどのように行っていくか。
- ④ 10分間の休み時間中に、約500名の生徒が校内を移動し、トイレや体育後の着替えをすませた上で、チャイム着席や授業の準備をする。教室移動を休み時間内にスムーズに行わせ、チャイムと同時に全生徒が授業に集中できるようにするにはどうしたらよいか。
- ⑤ 教科教室間の移動時や、教科エリアに3つの学年の生徒が集まった時でも、万が一の生徒同士のトラブルを起こさず、チャイムと同時にすぐに授業に集中させるにはどうしたらよいか。
- ⑥ オープンスペースで誰でも入れる場所（教科教員コーナー・教科の学習コーナー・ホームルーム・ラーニングセンターなど）の管理をどのように行うか。（公共物の管理、私物の管理）
- ⑦ 生活指導における全教職員間の組織的な情報連携・行動連携をどのように行っていくか。

(2) 2年間の取り組み

- ① 規範意識については、学校としての方針を定め、間違った行動には厳しく指導することを示し、日常的に実践している。また、道徳の授業においても、規範意識を高める指導を行っている。さらには、授業に集中させるための授業規律については、各教科教室の学習のルールを定め、各教室に掲示し指導している。なお、毎朝、朝読書を実施し、静かで落ち着いた状況の中で一日をスタートさせている。



朝読書

- ② 学校の相談機能を高めてきている。

ア 「木曜日は教育相談の日」

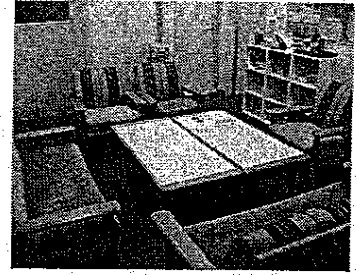
毎週木曜日の1校時に、校内委員会（管理職、生活指導主任、各学年・学級主任、特別支援教育コー

ディネーター、スクールカウンセラー、保健主任)を開催し、不登校や配慮を要する生徒の状況を全員で確認し、対応を協議して実践している。

イ スクールカウンセラーの相談活動を毎週木曜日に実施している。

ウ 日常的な相談の他に、三者面談、定期考査前の学習相談、職場体験前の校長面接、受験前の校長面接などにおいて相談・面接を実施している。

エ 生徒の個別の相談に応じるために、教育相談室や進路相談室などを積極的に活用している。



教育相談室

- ③ 「いじめ・暴力などは、人間としては絶対に許されない」という毅然とした姿勢で粘り強く指導することを方針として生徒に示しており、校長講話・各学級での担任からの指導や道德の授業での指導などの予防的な対応も行っている。未然防止・早期発見・早期対応に心がけている。
- ④ 休み時間の円滑な移動については以下の取り組みをしている。
 - ・ 年度当初に教室移動を想定した「行動訓練」を実施している。
 - ・ 生徒は休み時間中に、トイレに行く、終わった教科と次の教科の教科書等をロッカーにしまったり出したりする、体育の前後に更衣室で更衣をする、友達と楽しく会話するなどを行っている。教科担任が教科教員コーナーや教科教室で次の授業の準備をして生徒が来るのを待っている間に、生徒は大変忙しく行動している。そこで、生徒には移動時になるべくホームルームに帰らず、教室から教室へとすぐに移動できるように午前中や午後に必要な教科書等をバッグに入れて行動させている。
 - ・ トイレは学年に関係なく、使いやすいトイレを使用させている。
- ⑤ 教室移動時や教科エリアに3つの学年の生徒が集まった時に生徒同士のトラブルが起きないようにするために、以下の取り組みをしている。
 - ・ 教員が日頃から生徒間の様子や人間関係をよく把握するようにしている。
 - ・ どの教員もどの学年の生徒についてもかかわるようにしている。
 - ・ 万が一のトラブルには、複数の教員で対応するようにお互いに連絡を取り合う体制を整えている。
 - ・ 各教科エリアの端には教科教員コーナーがあり、教員が常駐している。教科教員コーナーの教員が日常的に生徒の行動観察や声かけをするようにしている。
 - ・ 必要に応じて教員による校内巡回を実施する。
- ⑥ 私物の管理については、ホームルームの個人用ロッカーを活用させている。公共物の管理は全教職員で実施しているが、朝礼や学級活動などにおいても生徒に指導を行っている。
- ⑦ 全教職員間の組織的な情報連携・行動連携については、生活指導は全員で行うことを原則としており、様々な課題については、全教職員での迅速な連絡と対応を心がけている。

(3) 主な成果

新校舎移転後、2年間の取り組みを経て、現在は、全体的に生徒はこのシステムに慣れ、スムーズな教室移動ができ、校内でのトラブルが発生している状況にはない。それに伴い、授業中は生徒が学習に集中しており、授業以外でも部活動など様々な分野で活躍している。教員も朝の打ち合わせを校内LANで行っているのも、早めに各ホームルームに行けるので、生徒と一緒にいる時間を多くとることができている。今後も、授業をより一層充実させ、生徒全員に豊かな心を育成するために、現在までに構築した生活指導の様々な取り組みを継続していきたいと考えている。

Ⅲ 研究の成果と今後の研究課題

1 研究の成果

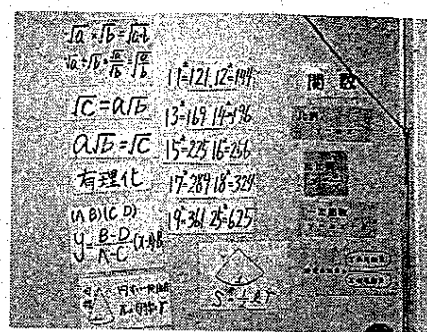
(1) 教科指導における成果

① 授業の改善

ア 教科センター方式による授業の改善

教科センター方式により、授業改善にかかわることについて、以下のことが成果としてあげられる。

- (ア) 教科の専門性を生かした授業をできるようになった。
 - (イ) 学習指導がしやすくなった。
 - (ウ) 同じ教科の教師との情報交換・打ち合わせ・教材の共有化などが行いやすくなり、学習指導の質の向上を図ることができるようになった。
 - (エ) 教科教室だけでなく、教科学習エリアも使用するなど、多様な学習指導が可能になった。
 - (オ) 教師にとっては教室移動がないために、授業の開始から終了までの授業時間を十分に活用することができるようになった。
 - (カ) 同じ教科（または近くの教科）の教師の授業を見る機会が増えた。
- 以上のことから、教科センター方式は授業改善につながるものと言える。



イ ICT機器の活用による授業の改善

授業におけるICT機器の活用により、以下のことが成果としてあげられる。

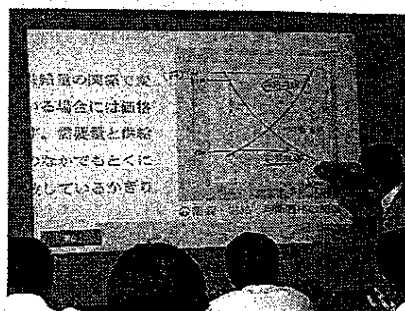
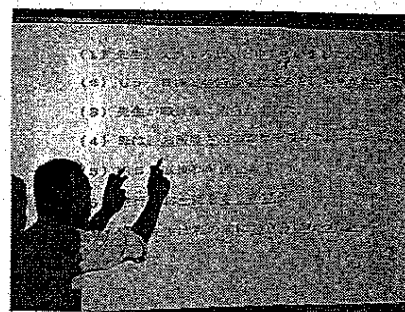
(ア) 教師の意識調査から

今年度、ICT機器の効果についての全教師へのアンケート調査を実施した。

その結果、次の活用方法に特に効果が高いと感じている教師が多いことが分かった。

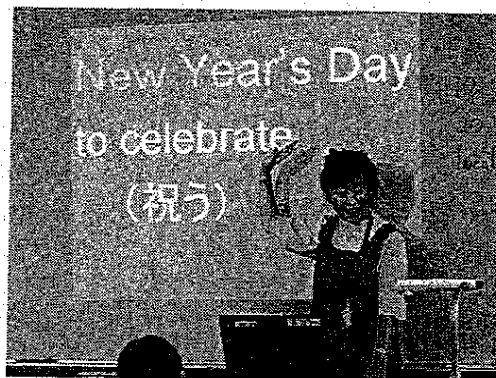
- 学習に対する生徒の興味・関心を高めるために、PC・実物投影機・プロジェクターを活用して資料などを効果的に提示する。
- 生徒一人ひとりに課題意識をもたせるために、PC・実物投影機・プロジェクターを活用して資料などを効果的に提示する。
- 分かりやすく説明したり、生徒の思考や理解を深めたりするために、PC・実物投影機・プロジェクターを活用して資料などを効果的に提示する。
- 学習内容をまとめる際、生徒の知識の定着を図るために、PC・実物投影機・プロジェクターを活用して資料などを分かりやすく提示する。

以上のことから、具体的な活用方法の中で、教師は



ICT機器による様々な効果を感じていることが分かった。

「生徒の興味・関心を高める」ことは、生徒の主体的な学びや課題追究にとって重要なことである。また、「分かりやすく説明する」という活用方法は、日常でのICT機器の活用の最も基本的な方法の一つである。さらに、視覚に訴えて効果的・効率的に説明することで生徒の理解や思考を深めたりすることは、生徒の学びを広げていくためにも大切なことであると考ええる。



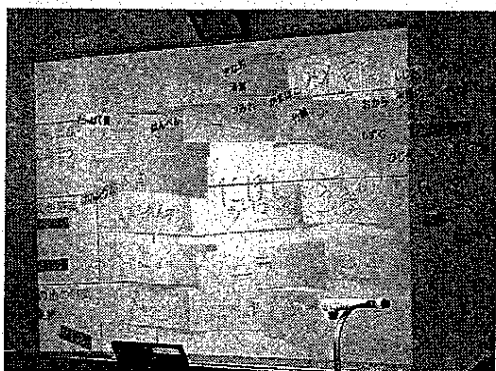
(イ) 生徒への意識調査から

今年度、ICT機器を活用した授業において、生徒向けアンケート調査を実施した。以下は生徒の感じているICT機器を活用した授業の有効性である。

- 画面を見ることで、話を聞くだけでは伝わらないようなことがしっかり伝わった。
- ICT機器を使ったことで、先生の説明や指示がわかりやすかった。
- 画面を見て、ノートやワークシートに進んで記入することができた。
- 授業の内容をよく理解できた。
- ICT機器を使ったことで、効率よく授業が進んでいるように感じた。
- 画面を見て学習内容に興味をもち、進んで学習に参加することができた。
- 興味をもって授業を受けることができた。
- ICT機器を使ったことで、実験・観察・実習・製作・実技などに進んで取り組むことができた。など。

上記の結果、「ICT機器を活用した授業」について、生徒は肯定的にとらえている。

特に、生徒は、ICT機器を活用した日常の授業の中で、「説明や指示が分かりやすい」と思っているが、日々の授業の中で「説明が分かりやすい」ということは、授業への関心や意欲を高めたり、理解を膨らませたりするなどの相乗効果もあると考えられる。



(ウ) ICT機器の活用による授業での効果のまとめ 主な効果をまとめると、以下のようになる。

○ 視覚に訴えることができる ⇒ 生徒の集中力が高まる

大きな画面に文字や写真・図・グラフなどを映し出すことができるので、生徒の興味・関心が高まり、意識を集中させることができる。集中できるということは授業においては非常に大きな効果である。

○ **工夫した教材を作成・提示することができる ⇒ 興味・関心を引き出す**

プレゼンテーションソフトや、DVD・ビデオ・実物投影機を駆使して、臨場感のあるものや生徒自身の姿や生徒自身の作品なども教材として提示することができる。これにより生徒の興味・関心が高まり、授業への態度（目の輝きや笑顔など、生き生きした生徒の反応）がより好転する。

○ **説明が論理的なものになる ⇒ 分かりやすい**

教師がプレゼンテーションソフトを使って教材を作成する際、「何をどのような順番で提示するのか」を考え、言葉を選び、ポイントを押さえ、順序立てて考えるため、思考が頭の中で整理された状態になる。授業の場面においても生徒にとってより論理的で分かりやすい説明になる。

○ **言葉では言い表しづらいことも提示できる ⇒ 百聞は一見に如かず**

言葉による説明では、分かりにくい事柄や、表現しにくい題材も、画像を映し出すことで簡単に伝えられるので、生徒が瞬時に理解することができる。

○ **写真・絵・グラフ等の提示が補助的役割をする ⇒ 場面設定・雰囲気作り**

語学の場面設定や、歴史的な背景など、学習内容に合った雰囲気作りも簡単に行うことができる。

○ **実技などの手順を分かりやすく示すことができる ⇒ 要領よく取り組める**

特に実技教科では、教師の手元の動きを大きく映し出すなどして、演示を効果的に行うことができ、要領よく作業などに取り組むことができる。

○ **効率を高めることができる ⇒ 時間の節約・指導時間の確保**

板書が精選されて時間の節約が図れ、生徒一人ひとりに対する指導時間を確保しやすい。

○ **繰り返し使うことができる ⇒ 反復の効果**

I C T教材の作成には時間がかかるが、繰り返し使用することができる。教材研究を計画的に行い提示用の教材を作れば、その後は、I C T機器で何度でも利用できる。

② 教師のI C T活用指導力の向上

本校では、「教師のI C T活用指導力チェックリスト（中学校・高等学校版）」（文部科学省）を活用して、定期的に教師のI C T活用指導力の確認を行っている。

この調査によると、「授業中にI C Tを活用して指導する能力」は、新校舎移転直後（平成20年4月）には、東京都平均・全国平均（平成20年度）と比較すると、I C Tを活用して指導する能力は学校全体としては低い状況にあったといえる。

しかし、移転1年後の平成21年3月には、大きく向上し、東京都や全国の平均を大きく上回った。これは、昨年度1年間、全教師がI C T機器を活用した授業に日常的に取り組んできた結果であると考えられる。また、平成21年7月にはさらに向上している。

現在では、本校の教師は授業にI C T機器を活用することを「日常的な能力」として身に付



けたと考えられる。

(2) 教科指導以外の成果

教科指導以外にも以下のような成果があった。

① 特別支援学級生徒への指導の充実

ア 通常の学級との「交流及び共同学習」の成果として、生徒の集団適応力や、社会性の向上が見られるとともに、学習面でも成果をあげた。

イ 通常の学級の教師や生徒の、特別支援教育に対する理解が得られてきた。

② ラーニングセンターの有効活用

ア 各教科・総合的な学習の時間・昼休み・放課後・部活動などにおいて、生徒がラーニングセンターを積極的に活用するようになった。

イ 図書コーナーが充実し、本の貸し出し数も増えた。

ウ 生徒にとって、「心の居場所」としての役割も果たすようになってきた。



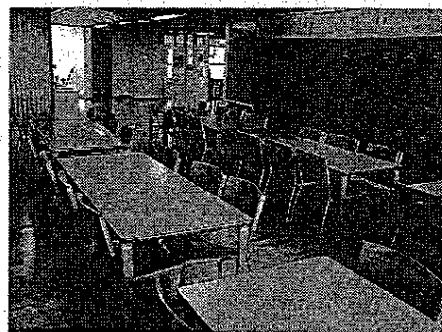
③ HR（ホームルーム）の有効活用

ア 朝読書・短学活・給食指導など、毎日の基本的な生活の場として定着し、担任と生徒及び生徒同士の心の交流を図る「心の居場所」ともなってきた。

④ 校務センターと教科教員コーナーの有効活用

ア 校内LANの活用、校内電話の利用など、ICTによる情報の共有化は、全教職員で日常的に実践できるようになった。

イ 校務センターはアドレスフリー（どの机でも仕事ができる）で、移動式ワゴンに校務や教科の資料を入れている。その移動式ワゴンを校務センターと教科教員コーナーに移動させて使うことで、校務センターと教科教員コーナーとの効率的な使い分けができるようになった。



ウ 教科教員コーナーに教師が常駐するため、「毎日・毎時間が教科部会」にもなり、教師の専門性や指導力の向上に役立ってきた。

エ 教科教員コーナーに教師が常駐することによって、生徒との日常的な学習相談や、定期考査前の個別指導などが頻繁に行われるようになった。

⑤ 校務のネットワーク化による情報の共有化

ア 校内LANの活用により、情報の共有化と迅速な伝達を図ることができ、文書事務の軽減化につながった。

⑥ エコ・スクールの理念を生かした環境学習の推進

ア 各教科等の環境に関する学習（地球環境問題など）が充実してきた。

イ 太陽光発電などの省エネルギー・省資源への関心が高まってきた。

ウ クリンピック（全校生徒による美化活動）の開催により、生徒の環境美化への意識が高まってきた。

エ 再生紙回収ボックスの設置により、紙ゴミ排出量の減少が図られた。

⑦ 生活指導の充実

ア 生徒は新校舎のシステムに慣れるに従い、落ち着いて学校生活を送るようになった。

(3) まとめ

平成20・21年度の2年間の研究実践をとおして、まずは、教師が意識改革を図り、教科の専門性を高めるとともに、本校の恵まれた教育環境を最大限生かそうと試行錯誤しながら努力をしてきた。その結果、授業改善などに成果が出てきている。

現在、どの学年の生徒も、教科センター方式及びICT機器を活用した授業に前向きに取り組み、意欲的に学習に励んでいる。新校舎での生活にも慣れ、学習以外でも委員会・部活動・ボランティア活動など様々な教育活動にも生き生きと取り組んでいる状況にある。

2 今後の研究課題

今後の研究課題として、以下のことに取り組んでいきたい。

- (1) 教科センター方式の利点を生かし、本校の教育目標である「自立と共生」の具現化を一層図っていくこと。
- (2) 教師の専門性をより一層高めるとともに、各教科の特性に応じたICT機器のより有効な活用方法を工夫し、授業の質と生徒の学力をさらに高めていくこと。